

発話理解の多重性と会話進行: 「説明的発話連鎖」の分析から

高梨 克也 井佐原 均
Katsuya TAKANASHI Hitoshi ISAHARA

通信総合研究所
けいはんな情報通信融合研究センター
Keihanna Human Info-Communication Research Center,
Communication Research Laboratory
{takanasi, isahara}@crl.go.jp

1 はじめに

本発表は会話内で生起する説明を分類することによって、会話の整合的な進行を支えるメカニズムの多重性を明らかにすることを目指す。特に、聞き手による発話理解は必ずしも自動的で受動的な過程ではなく、聞き手が発話を徴候として利用することによって、整合的な解釈を能動的に発見する過程であると見なすべきであると主張する。

2 二つの世界

発話は二つの世界の接点である。一方で、発話は発話命題によって「対象世界」を記述する。これは主に発話のもつ意味論的側面である。他方で、発話には話し手による命題態度(言語行為の遂行を含む)、すなわち話し手と発話命題との間の関係が伴っている。この関係は会話世界内でのものであり、発話のもつ語用論的側面であるといえる。言い換えれば、すべての発話はこの発話によって記述された対象世界での出来事と、この発話によって言語行為を遂行するという会話世界での出来事を結び付けるものである。これを「発話の二重構造」と呼ぶ。

Utterance = $\frac{\text{Speaker } V \text{ perf/att that } S + V}{\text{遂行・態度節 (会話世界)} \quad \text{命題 (対象世界)}}$

図 1: 発話の二重構造

しかし、発話のもつ二つの世界は必ずしも言語的に明示されているわけではない。従って、聞き手による発話理解の過程とは、当該の発話に対してこれを二つの世界の中に同時にかつ整合的に位置づける解釈を発見する過程であるといえる。

にもかかわらず、会話における相互の理解はさほど困難な課題ではない。それは、発話には何かを伝達することによって、聞き手による次の発話を促すという側面だけでなく、先行する発話に対する理解状態を提示するするという側面も伴っているからである。Clark[2]はこれらの各側面を受容 acceptance の側面と提示 presentation の側面と呼んでいる。受容面は先行発話との関係であり、提示面は後続発話との関係である。これを「発話の二面性」と呼ぶ。

A:Utterance1 — (acceptance) \ (presentation) \
B:Utterance2 — (acceptance) / \ (presentation) \
A:Utterance3 — (acceptance) / \ (presentation)

図 2: 発話の二面性

このように、先行発話に対する聞き手の応答のなかには相手の先行発話についての理解の証拠が現われており、その結果形成された会話連鎖は会話参与者相互の理解の過程を反映したものとなっている。つまり、各参与者は相手の理解状態をモニターしつつ、相互理解を局所的に調整し合っているのである。この意味で、会話における各参与者の理解状態は互いにとって透明である¹。

発話の二重構造(図1)と発話の二面性(図2)を縦横の糸と考えるならば、ある発話は先行/後続発話との間に、対象世界/会話世界における二重の関係を有していると言える。

次節では、発話理解における困難がこの二重性に

¹こうした観点は会話分析的な連鎖分析に基づくものである。会話分析の概略については高梨 [9] 参照。

よって区別できること、および、こうした困難が会話連鎖を通じて組織的に解決されることを考察する。

3 説明と会話構造

聞き手が当該の発話を二つの世界に同時に位置づけることに困難が伴う場合、聞き手がこの発話を誤解したり、これについての説明を要求したりする可能性が生まれる(ただしこの要求自体もまた必ずしも明示的である必要はない)。発話理解をめぐる参与者間の調整は、対象となる発話に対してメタレベルに位置するはずであるが[1]、しかし、日常会話に関してはこうした階層の区別は困難である。従って、会話においては、誤解やその他の理解上の困難の顕在化と解決は、以下で論ずるように、あくまで連鎖的に行われることになる。

3.1 誤解修復のための連鎖構造

会話の頑健性は、理解上の困難が表面化した時点で局所的に発動される修復 repair のメカニズムによって支えられている。確かに生じうる誤解を未然に防ぐことは重要だが、どのような手段によっても誤解の発生は不可避である以上、生じてしまった誤解を速やかに修復する手続きの存在は会話の成立のための不可欠な基盤である。

上述のように、ある発話 T2 は先行発話 T1 に対する理解を呈示 display する。よって、逆に先行発話 T1 に対する誤解が表面化するのも T2 においてである。従って、単純な言い誤りなどの場合とは異なり、T1 に対する誤解を修復する手続きが発動するのは T3 以降においてである[5]²。

T1 A: Which ones are closed, and which ones are open. [被誤解発話]

T2 B: Most of them.

*This, this, this, this ((pointing))

[誤解の表面化]

T3 A: *I don't mean on the shelters,

I mean on the roads. [修復]

T4 B: Oh! [自身の誤解の認知]

(*: 同時開始)

²より正確には、T1 の話し手が相手の誤解を T3 において明示的に修復する場合と、T3 では誤解を認知させるための間接的な手段のみを用い、T4 において T2 の話し手が自ら誤解を修復するように仕向ける場合の区別がある。

3.2 誤解の修復と説明的発話連鎖

先行発話に対する問題が生じるのは、上述のような明確な誤解の場合だけではない。聞き手が当該の発話のある部分に対して何らかの疑問を抱く場合もある。こうした聞き手からのいわば「反論可能性」についても、誤解修復の場合と類似の連鎖構造を用いて特定できる。

(1) A1: 風邪をひいたんだ。

B: どうして?

A2: 雨に濡れたんだよ。

(2) A1: 風邪をひいたんだ。

B: ほんと?

A2: 熱があるんだよ。

これらの例では、A2 は A1 についての B の疑問に対する「説明」となっており、やりとりの連鎖構造は誤解の修復の場合と類似している。しかし、先行発話に対する「説明」にはさまざまなレベルのものが観察される。(1) の A2 は A1 の命題で述べられている事態「A が風邪をひいた」の原因を説明しているのに対して、(2) の A2 は「風邪をひいた」という A の判断に対する疑問に答える説明である³。A1 に対する聞き手の疑問の焦点は、次のような言い換えによってより明らかになる。

(1') 風邪をひいたのは雨に濡れたからだ。

(2') 「風邪をひいた」と話し手が判断したのは熱があるからだ。

(下線は疑問の焦点)

このことから、発話理解には対象世界が焦点となる場合(図3)と話し手を登場人物として含む会話世界が焦点となる場合(図4)があることが分かる⁴。

さらに、会話世界が疑問の焦点となる場合には、以下のような関係もある。

(3) A1: あの本とって。

B: どうして?

A2: 届かないのよ。

(4) A1: 明日は雨だよ。

³談話の修辭構造 Rhetorical Structure の観点からいえば、(1) の場合の A1 と A2 の関係は意味論レベルでの「結果」と「原因」の関係、(2) の場合は語用論レベルでの「判断」と「根拠」の関係である[4]。

⁴この点は、発話理解に際して表出命題のみが特定される場合とこの命題を埋め込み節として持つ遂行・態度節をも含む高次表意 higher level explicature が形成される場合があるという、関連性理論[6]における区分を拡張したものである。

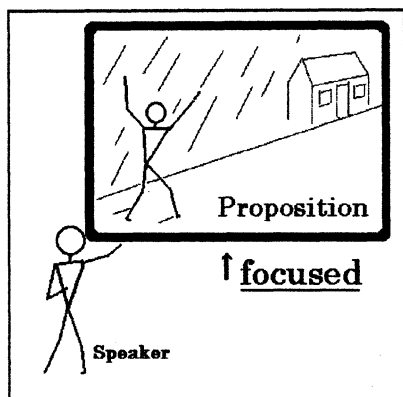


図 3: 焦点=対象世界

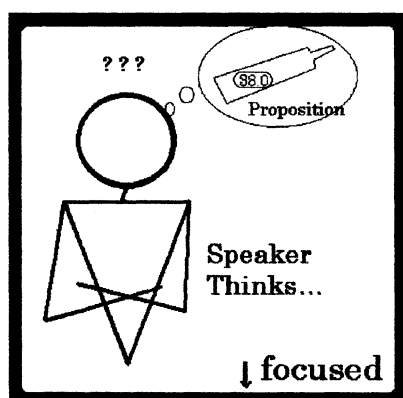


図 4: 焦点=会話世界

B: ほんと?

A2: だって、今天気予報でそう言ってたもの。

(5) A1: 明日は雨だよ。

B: え?!

A2: だって、明日は遠足だって言ってたじゃない。

(3) の場合、A2 の説明は A1 の発話内行為「依頼」の正当性に関するものである。また、(4) は (2) と同様の「判断」と「根拠」の関係であるのに対して、(5) の A2 は聞き手が A1 から引き出すことのできなかった含意を明示するものである。これらについても、疑問の焦点を明示すると、

(3') 「あの本とって」と話し手が依頼したのは

届かないからだ。

(5') 「明日は雨だ」と話し手が言ったのは「遠足は中止だ」ということを知らせるためだ。

(下線は疑問の焦点)

このように、以上の例の A1 を P, A2 を Q とするならば、会話における誤解や説明には表 1 のような階層的区別が可能である。これらの関係をまとめて「説明的発話連鎖」⁵ と呼ぶ [7]。

- 関係 1: 原因や理由の説明— Q が P で表現された出来事の原因や理由である場合
- 関係 2: 判断の根拠— Q がある判断 P の根拠となっている場合
- 関係 3: 発話行為の正当化— Q がある発話内行為 P を行うことの原因となっている場合
- 関係 4: 関連性の明示— Q が P を言い換えたり、別の角度から述べたり、要約したりしている場合

表 1: 説明的発話連鎖の種類

まとめると、関係 1 は記述された出来事のレベル(対象世界)での関係、他のものは P の言語行為レベル(会話世界)での適切性や関連性を説明するものである。

4 徴候としての発話

発話理解の際に聞き手が当該の発話のどの部分に焦点を当てるかは状況依存的である。このことは、(1) と (2), (4) と (5) のそれぞれの組み合わせにおいて、ともに同一の A1 に対して異なるレベルでの説明が提示されていることから明らかである。このように、会話の進行は聞き手による理解状態に依存し、これを反映するものとなっている。

さらに、聞き手が発話理解に際して会話世界内での話し手の位置づけを考慮に入れるか否かは、部分的には話し手の意図を越えたものであり、聞き手の任意的な解釈によるものである。つまり、聞き手は常に、話し手自身が意図していなかったかもしれない話し手の立場に注意を向けることができる。

(6) A: もうこんな時間か。

B: そんなにイライラしないで。

⁵ これらの PQ 間の関係は「P, Q のだ。」と言い換えることができる。

Bの解釈「Aはイライラしている」は必ずしもAが伝達を意図した内容ではないかもしれないが、この会話の流れはきわめて自然である。このように、聞き手は話し手の発話態度ともいうべきものを視野に入れた能動的な解釈を行うことが可能である。つまり、聞き手は任意にかつ能動的に、発話解釈の焦点を会話世界に向けることができる⁶。こうした解釈の能動性によって、会話はより厚みのある、有機的なものとして組織化されていくのである。

意味についての Grice[3]の考察に従えば、例えば煙が火事を意味するという場合の「意味」は「自然的意味」であるのに対して、話し手が言語を用いることによって伝達することを意図した内容は非自然的意味であり、従って、従来両者は区別可能であると考えられてきた。なお、前者の場合は煙が火事の「徴候」となっていると表現することもできる。これはパース [10] の記号分類における「指標記号 index」に対応する。

しかし、本稿の考察によれば、発話解釈とは聞き手が当該の発話を対象世界と会話世界に同時に整合的に位置づける解釈を発見する過程であり、さらに、こうした解釈の中には話し手が意図した内容の復元以上の部分が含まれていることになる。従って、聞き手が発話理解として能動的に行っていることは、むしろこの発話を会話世界と対象世界のそれぞれについての「徴候」として利用し、そこからアブダクション的に整合的な解釈を発見する試み [10] であると見なすが、より包括的なのではないかと考えられる⁷。発話は聞き手が次の発話を生み出す際に積極的に利用できるリソースなのである。

5 おわりに

一方で、発話はその命題によって記述された対象世界と、これを発するという言語行為が属する会話世界とを結ぶ接点である。他方で、発話は先行発話への応答であるとともに、後続発話による能動的な解釈を誘発するリソースである。このように、発話はさまざまな関係によって会話内に定位し、その意味を与えられるのであり、会話は先行発話に対する聞き手の能動的解釈とこれに基づく創造的応答を動

因として進行しているのである。

参考文献

- [1] Bateson, G. 1972. Steps to an Ecology of Mind. The Estate of Gregory Bateson.
- [2] Clark, H.H. & Schaefer, E.F. 1989. Contributing to discourse. *Cognitive Science*, 13: 259-294. (Reprinted in Clark, H.H. 1992. *Arenas of Language Use*. The University of Chicago Press & Center for the Study of Language and Information. 144-175.)
- [3] Grice, H.P. 1957. Meaning. *Philosophical Review*, LXVI: pp.377-388.
(清塚邦彦訳『論理と会話』第8章「意味」勁草書房, 1998)
- [4] Sanders, T.J.M., Spooren, W.P.M. & Noordman, L.G.M. 1992. Toward a taxonomy of coherence relations. *Discourse Processes*, 15:1-35.
- [5] Schegloff, E.A. 1992. Repair after next turn: The last structurally provided defense of intersubjectivity in conversation. *American Journal of Sociology*, 97-5: 1295-1345.
- [6] Sperber, D. & Wilson, D. 1986. *Relevance: Communication and Cognition*. Blackwell.
(内田聖二他訳『関連性理論－伝達と認知』研究社出版, 1993)
- [7] 高梨克也 1999a 「発話行為類型と修復連鎖構造－発話についての説明の利用可能性－」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-9902: 61-66.
- [8] 高梨克也 1999b 「発話理解の推論モデルにとって発話行為論とは何か」『語用論研究』創刊号: 59-73.
- [9] 高梨克也 2000 「社会的相互行為を見る方法: エスノメソドロジーと会話分析の基礎」人工知能学会研究会資料 SIG-SLUD-A002: 29-36.
- [10] 内田種臣 (編訳) 1986. 『パース著作集 2 記号学』勁草書房
- [11] Watzlawick, P., Bavelas, J.B. & Jackson, J.J. 1967. *Pragmatics of Human Communication: A Study of Interactional Patterns, Pathologies, and Paradoxes*. Norton.
(山本和郎監訳、尾川丈一訳『人間コミュニケーションの語用論－相互行為パターン、病理とパラドックスの研究』二瓶社, 1998)

⁶ 「相互作用している状況において全ての行動がメッセージとしての価値を持つ、つまりコミュニケーションであるとするならば、どのようにしてもコミュニケーションしないことはできないということになる。」[11]

⁷ 従来の語用論的枠組みをこうした方向性で再解釈する試みについては高梨 [8] 参照。